

## 第2課題 教育課程に関する課題

### よりよい教育課程の編成・実施をどう行うか —『3つの柱』の育成について—

甲府支部

#### I はじめに

今日の教育課程の編成・実施において、子どもたちが変化の激しい社会を自立的に生き抜く力を育むことは喫緊の課題である。これまでの知識の伝達中心の教育から、より本質的な資質・能力を育む方向へと教育の重心が移っている。

このような教育の転換を支えるのが、「①知識・技能、②思考力・判断力・表現力等、③学びに向かう力・人間性等」の3つの柱である。これらを一体的に育成することで、単なる知識の習得に留まらず、それを活用して自ら課題を発見・解決する力や、多様な人々と協働する態度を培うことが求められている。

本研究では、この3つの柱をいかにして教育現場で具現化していくかについて、本市の公立中学校の実態を踏まえながら考察する。

#### II 研究のねらい

本研究は、教頭として、教育課程の編成・実施を通じて「3つの柱」を効果的に育成するための方策を探ることを目的とした。具体的には、以下の点を明らかにした。

- ・甲府市立中学校教員の「3つの柱」に関する理解度と意識の現状
- ・各柱の育成における課題と有効な指導方法の考察
- ・教頭が教育課程の編成にどのように関わっていくべきか

#### III 研究経過（方法）

本研究では、甲府市立中学校の教頭および教員育成指標の各ステージの教員を対象にアンケート調査を実施した（アンケートは主に以下の項目で構成）。アンケート結果をもとに傾向や課題を分析し、方向性を検討した。

<アンケート項目>

1. 所属校、教員育成指標のステージ

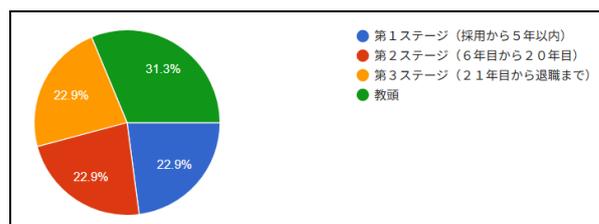
2. 「3つの柱」の理解度
3. 学校全体で最も力を入れている柱
4. ご自身の教科指導における「3つの柱」の意識
5. 「個別の知識・技能」の定着度
6. 「個別の知識・技能」の課題
7. 「思考力・判断力・表現力等」の保障
8. 「思考力・判断力・表現力等」の課題
9. 「学びに向かう力、人間性等」の育成
10. 「学びに向かう力、人間性等」の課題
11. 教育課程の編成・実施における課題
12. 教育課程の編成や実施、「3つの柱」の育成等への教頭の関わり

<アンケート対象：市内教頭・教諭48名>

本アンケートの対象者の内訳は、以下の通りである。幅広い教職経験年数や立場からの回答を得ることで甲府市立中学校の実態がより明らかになると考えた。

教頭15名

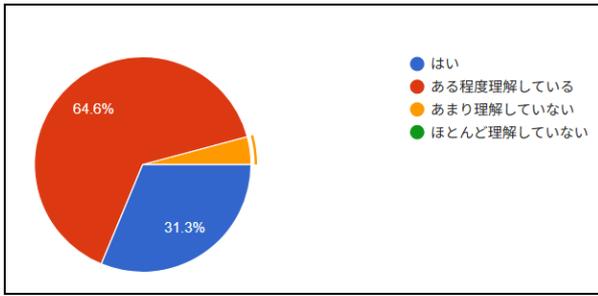
- |                   |     |
|-------------------|-----|
| 第1ステージ（新採用から5年目）  | 11名 |
| 第2ステージ（6年目から20年目） | 11名 |
| 第3ステージ（21年目以上）    | 11名 |



#### IV 研究内容

アンケート結果の分析（抜粋）

- Q2. 「3つの柱」について、内容を十分に理解していますか。（理解度）



回答者全体の31.3%が「はい」と回答し、64.6%が「ある程度理解している」と回答している。教員全体として「3つの柱」の理念が浸透していると考えられる。

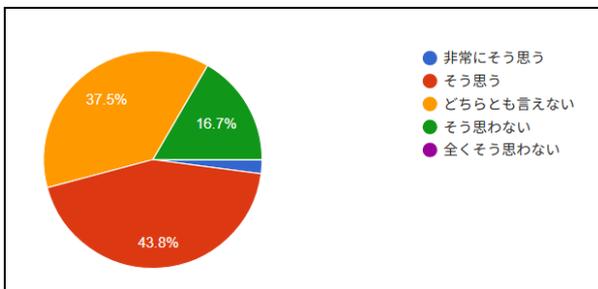
Q3. 学校全体として最も育成に力を入れていると感じるものはどれですか。

最も力を入れていると感じる柱として、「思考力・判断力・表現力等」が43.8%と最も多く、「学びに向かう力、人間性等」が37.5%、「個別の知識・技能」が18.8%となった。

これは、教員全体として探究的な学習や学習に向かう意欲や人間性の涵養を重視する傾向が強いことを示していると考えられる。

#### 【個別の知識・技能】について

Q5. 「個別の知識・技能」を十分に身につけていると感じますか。（定着度）



「非常にそう思う」（2.1%）「そう思う」（43.8%）」と回答して一方、「そう思わない」は16.7%とあり、「どちらとも言えない」（37.5%）も含めると多くの教員が生徒の知識・技能の定着に課題を感じていると考えられる。

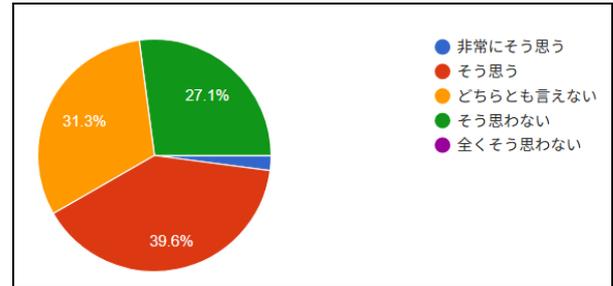
Q6. 「個別の知識・技能」の定着を図る上で、どのような点に課題を感じていますか。（課題）

「個別最適な学びへの対応」（64.6%）「活用できる知識・技能の育成が不十分」（56.3%）「児童生徒の学習意欲の維持が難しい」（39.6%）が上位を占めた。

個別最適な学びの重要性を理解しつつも、生徒の学習意欲を高めることも含め、個々の生徒に十分な知識・技能を定着させるための対応に困難さを感じていると考えられる。

#### 【思考力・判断力・表現力等】について

Q7. 児童生徒が、自ら課題を見つけ、考え、判断し、表現する機会が十分に保障されていると感じますか。（保障）



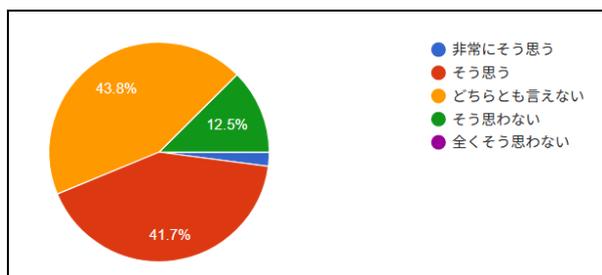
「そう思わない」が27.1%あり、「どちらとも言えない」（31.3%）も含めると、「十分な機会が保障されている」かについて課題を感じていることが明らかになった。なお、「思考力・判断力・表現力等」を育成するための指導方法として「グループワーク」（87.5%）「ICTを活用した学習」（68.8%）が別項目のアンケートで特に多かった。

Q8. 「思考力・判断力・表現力等」の育成に関して、どのような課題を感じていますか。（課題）

「指導時間の確保が難しい」（56.3%）「評価方法の難しさ」（50%）「児童生徒間の思考力」（50%）が上位を占めた。育成に力を入れたいが、十分な育成をするためにはそれ相応の時間が必要であるが、学習内容や進捗の関係もあり確保は難しい。また質的な評価等をする場合、評価方法も難しいと考えられる。現実に思考力の差が大きい中でどのように育成していけばよいか課題を感じている。

#### 【学びに向かう力、人間性等】

まず、「児童生徒が、粘り強く学習に取り組む姿勢や、自己肯定感、多様な他者と協働する力などを身につけていると感じますか。」の質問を行った。



「非常にそう思う」(2.1%)「そう思う」(41.7%)と回答してる一方、「そう思わない」が12.5%あり、「どちらとも言えない」(43.8%)も含めると、生徒が身につけているか課題に感じていることが分かった。

Q9.「学びに向かう力,人間性等」の育成をするために,学校全体としてどのような取り組みが行われていますか。(育成)

「特別活動」(72.9%)「総合的な学習の時間」(68.8%)「道徳教育」(50%)「体験活動」(50%)「ICTを活用した協働学習」(45.8%)が上位を占めている。道徳教育だけではなく,特別活動や体験活動など実際に多くの人と関わる活動の中で,それぞれの学校が育成を図っていることが分かる。また,ICTを活用し,他者と協働的に関わることで育成していることも分かった。

Q10.「学びに向かう力,人間性等」の課題

「評価が難しい」(72.9%)「児童生徒の多様な背景への配慮が難しい」(60.4%)が他の選択肢に比べてきわめて多かった。

学ぶ姿勢や意欲,興味関心のポイントなど多種多様な思考や感性,それに影響を及ぼしている背景を持っている生徒たちの文言や作成物を評価することの難しさを多くの教師が感じていると考えられる。

Q11. 教育課程の編成・実施における課題について

・「現在の教育課程は,『3つの柱』をバランス良く育成できる内容になっているか」という質問に対して「どちらとも言えない」(45.8%)「そう思わない」(12.5%)が「そう思う」(41.7%)を上回り,教育課程で「3つの柱」をバランスよく育成できていないと感じている。

・教育活動の編成における改善点

「各教科の目標・内容の見直し」(58.3%)「学習評価のあり方」(56.3%)「教科横断的な学習の推進」(41.7%)が上位を占めた。

上記の「バランスよく育成」できていないことと相まって,「目標・内容の見直し」「教科横断的な学習の推進」の必要性を感じていることが見て取れる。また,生徒が行った学習の評価をどう工夫していくか,どう見取るかを改善したいと考えている。

Q12. 教育課程の編成や実施,「3つの柱」の育成等への教頭の関わり(教頭のみ回答)

### 1 教育課程の編成や実施における教頭の役割について

(1) <共通点と傾向>

#### ①連携と協働の重視

教職員,保護者,地域,外部機関など,さまざまな関係者との連携・協働の重要性が必要である。これは,教育課程の編成や実施が学校内だけでなく,より広いコミュニティとともに行うべきものであると認識していると考えられる。

#### ②対話とコミュニケーションの重視

保護者や教職員との対話や意見交換を積極的に行い,共通理解を深めることが重要である。一方的な指示ではなく,双方向のコミュニケーションを通じて課題を解決しようとする姿勢が見てとれる。

#### ③教育課程の改善と充実への意欲

評価や振り返りを通じて,教育課程を常に改善し,充実させていくことへの意欲がうかがえる。これは,単に教育課程を運営するだけでなく,より良いものに進化させていこうとする能動的な役割を示している。

(2) <重要なポイント>

#### ①リーダーシップとサポート

教頭が教育課程の推進役としてリーダーシップを発揮しつつ,教職員一人ひとりの自主的な学びや実践をサポートすることが重要だと考えられている。

#### ②全体像の把握と教育課程の意義の共有

学校全体の状況や各教科の特性を把握し教育課程の意義を教職員に伝え,共通の理解を深めることが,教育課程を効果的に実施するために不可欠であると捉えられている。

### ③学校の独自性や課題の反映

学校の特色や課題、保護者の意見などを教育課程に反映させることが重要だと考えられる。

これは、画一的な教育ではなく、その学校ならではの教育を作り上げていくという、教頭の専門的な役割を強調している。

## Q13「3つの柱」の育成に関する教頭としての提案や学校全体の取り組みについて（教頭のみ回答）

### 1 <共通点と傾向>

#### （1）組織的な連携と協働

学校全体で共通の目標を持ち、日々の指導にあたるために、教職員間の連携や情報交換を密に行うことの重要性を訴えている。これは、カリキュラム・マネジメントの充実にもつながると考えられる。

#### （2）「主体的・対話的で深い学び」の実現

具体的な方策として「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を挙げており、これらを通して「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すべきだとしている。

#### （3）教職員の資質向上

教職員が自らの実践を振り返る場（校内研究等）や、基本的な授業技術を学ぶことの重要性を指摘している。また、外部講師を招いた校内研究会の実施も提案しており、教職員の専門性の向上を重視していることがわかる。

#### （4）生徒一人ひとりへの対応

生徒が抱える多様な特性や事情に対応するため、基礎学力の充実を図ることの必要性、そして生徒を深く見取ることの重要性を強調している。

### 2 <重要なポイント>

#### （1）「学び」を広げるための取り組み

教科横断的な学習や、学習内容と日常生活との結びつきを重視しており、知識の定着だけでなく、それを活用できる力を育むことを目指している。

#### （2）具体的な評価方法の共有

「3つの柱」に基づく教育活動の成果を評価するために、具体的な評価方法を教職員間で学び合うことが重要だと述べている。

#### ・校内研究の活性化

経験や感覚に頼るのではなく、教育活動を客観的に検証するために、学年や学級の実態に応じた校内研究会を継続的に実施していくことが、学校全体の底上げにつながると考えている。

全体として、「3つの柱」を理念として掲げるだけでなく、それを実現するための具体的な教職員の行動変容や、学校組織としての仕組みづくりにまで踏み込んでいる点が特徴的である。

## V 研究のまとめと今後の課題

アンケート結果から、全体的に「3つの柱」の重要性を深く理解しているものの、実際の教育活動においては、知識・技能の定着や思考力・判断力・表現力等の育成、学びに向かう力、人間性等の涵養に課題を感じていることが明らかになった。

これらの課題を克服するためには、教頭が中心となり、以下の役割を果たすことを提案したい。

### 1 教員全体の意識統一と指導力向上

全教員が理念を共有し、授業改善に取り組むための研修を企画・実施する。

### 2 カリキュラム・マネジメントの強化

各教科の連携を密にし、教科横断的な学習を推進することで、学習内容を効率的に深める機会を創出する。

### 3 学習評価の改善

記述式・論述式の評価やルーブリック評価などを適切に活用できるよう、教員を支援し、評価方法の統一を図る。

教頭は、これらの取り組みを通じて、学校全体の教育の質を高める「教育のプロデューサー」としてリーダーシップを発揮することが期待されている。

（文責 中込 幸雄）